

死と創造性

—多重の喪失体験による複雑性心的外傷への心理療法過程に
作品造りを持ち込むことを巡っての一考察—

近藤正樹

喪の作業と対象喪失

対象の喪失からの喪の過程を力動心理学的な立場から最初に論考したのは、精神分析の創始者のフロイトであった。彼は、1915年に1次稿が書かれた「喪とメランコリー (Trauer und Melancholie)」で、対象喪失者の心的過程の変遷を「喪の作業」(Trauerarbeit)と名付けた。

この論文の中でフロイトは、「喪は通例、愛された人物や、そうした人物の位置へと置き移された祖国、自由、理想などの抽象物を喪失したことに対する反応である」¹⁾と説明し、その範囲は死別に限らず、属性、価値観、思想など自己にとっての重要な対象を喪うことによって生じるものまで広範囲に及ぶ。更に、「喪には正常な生活態度からのなほはだしい逸脱がともなうにもかかわらず、わたしたちは、喪は一定の時間がたてば克服されると信じており、喪の邪魔をすることは役に立たないばかりか有害でさえあると考えている」²⁾と指摘している。

また、「喪とメランコリー」に続く同年の論文「無常」(Vergänglichkeit)では、先の論文による喪の視点を進めて、リビドと対象について考察している。この論文では、自我に向けられていたりリビドは自我の発達に伴い、対象に振り向けられ、自我の中に取り入れられるとされる。一方、対象を喪失したことにより、リビドが対象から分離されることがなぜこうも痛ましい出来事になるのかについては、まだ理解されていないとフロイトは述べる。彼は喪の過程の不可思議さを「私たちに分かるのは、ただリビドはその対象にしがみついている、代替物を手にすることができるまででさえ、失われたものを諦めようとしないうことである。しかるに、これが喪の悲しみなのである」³⁾と述べている。フロイト自身は掴みかねていた部分もあるものの彼の貢献により、これらの論文以降、死別による喪失と喪について精神医学や臨床心理学の射程の範囲におさめられることになった。

その後、喪の悲しみについての直接的な言及はなされていない。ただし、生命の逃れられない生と死を巡る運命についての思考は続けられて行く。フロイトは1920年に著した「快原理の彼岸」の中で、「欲動とは、より以前の状態を再興しようとする、生命ある有機体に内属する衝迫である」⁴⁾とし、そこから生命の究極の目標を以下のように結論付けている。

生命のあるものがかつていったん放棄したものの、あらゆる進化発展の迂路を経ながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態でなければならない。生命あるものはすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰ってゆくということを、例外なき経験として仮定することが許されるなら、われわれは次のようにしか言いようがない。すなわち、あらゆる生命の目標は死であり、翻って言うなら、無生命が生命あるものより先に存在していたのだ、と。⁵⁾

生命の内にある無機的状态の元に帰ろうとする欲動は「死の欲動」(Todestrieb)と名付けられた。この死の欲動とは、生命を内的緊張が生じない状態である元々の物質の状態に還ろうとするものである。その一方で生命は、無機質から生命が誕生し二つの個体に分裂して以来、分裂した個体同士が再び融合することによって生命の刷新を行ってきた。この融合と刷新を断続的に行うことで生命の不死性を確保しようとするのが、「生の欲動」(Lebenstrieb)である。フロイトは有機体が生まれた時点にまで遡り、それ以来単細胞生物から多細胞生物、そして人間へと進化する過程の中でも受け継がれて来た根本的な生命の意識の中に、「有機的生命体を生命なき状態へ引き戻すことを使命としている」⁶⁾ 死の欲動と、生命を長らえて保持しようとする生の欲動が同時に存在するとした。

続く1923年の論文「自我とエス」の中では、メランコリーの説明の中で、「同一化」(Identifikation)により愛する対象が喪われた場合、その対象を自我の中に打ち立てて、自我変容を行うとされた。それまで同一化は、メランコリーによる病的な悲嘆に限定されていたが、自我の形成にまで拡大して用いられるようになり、悲哀の心的過程の特徴としても理解することができる。ただ、この中で批判されてきたことは、「同一化の過程で口唇期の機制へのある種の退行ともいえるこの取り込みを通して、対象の断念を容易ないしは可能にしているのかもしれない」と推論した点である。元々フロイトは、同一化の特徴を「個人の原始的な口唇期においては、対象備給と同一化はおそらく区別不可能な状態にある」とし、「早期の成長段階において頻発するもの」と理解していた。そこから悲哀の心的過程を愛する対象との死別によって、自己のナルシズムが脅かされる状態にさらされた後、人格の退行が行われ、同一化を通して再び人格の統一がなされるとした。⁷⁾

この様なフロイトによる喪の理解は、その後多数の研究者が取り上げ、現在の死別研究にも多大な貢献を果たしている。その一方で、フロイトの言うような悲哀の理解は神経生理学的な視点からの考察であり、実際の死別の悲哀の一面を論じているに過ぎないという批判がなされている。

批判の第一に、悲哀は時間が経てば克服されるものとされたが、リンデマンが指摘したように、grief^[1]には時を経ることで解決される「正常な悲嘆」(normal grief)だけでなく、時が経っても解決しない「病的な悲嘆」(morbid grief)があり、時がすべてを解決するという考えは「死別神話」であるというものが挙げられる。⁸⁾ フロイト自身も指摘しているように、悲哀からメランコリーへは移行し易く、それ以外の二次的な精神疾患を伴うことがあることから、死別反応の中には臨床的な関与の必要性があるものとされている。⁹⁾ 現在では、この死別の悲哀が持続的に慢性化した状態を臨床単位とすることが検討されている。ここから更に、悲哀をどう扱うのか、遺族自身を取り組むべき喪の作業の問題なのか、それとも専門家による治療(care)が必要なのか、あるいは遺族会などの自助組織が必要なのかという議論が起きている。¹⁰⁾

第二に、愛する対象が喪われた場合、同一化による自我変容が起こるとされ、喪失の対象を同一化によって自我に取り込めない間は、口唇期の機制への退行が生じるとされたことへの批判がある。確かに、人は愛する他者を亡くすと、一時的に混乱し、取り乱すことがあり、いつも死者のことを考えたり、遺品にこだわったりもする。それを退行と呼べなくもないが、しかし、愛する他者を自我の中に取り組み、同一化が果たされリビドーの固着が減れば、それで解決するとは考えられない。

ここまで、フロイトの喪の作業を振り返りながら、死の問題を考察してきたが、喪についての概念を考察したフロイト自身も死別による体験や戦争による喪失体験を重ねている。特に、第1次世界大戦後の1920年には、精神分析の発展に多大な貢献を果たし、窮乏していたフロイトに財政的な

支援をしていた、アントン・フォン・フロイントが亡くなった。その死からわずか5日後には、「日曜日の子」(Sonntagskind)と呼んでかわいがった娘のゾフィーを26歳の若さで喪っている。次いで、1922年には姪のツェツィーリエ・グラーフが自死した。更にその翌年、孫のハインツ・ルードルフ・ハルバーシュタットもわずか4歳半で亡くなっている。¹¹⁾ 1920年の友人プフィスターへの書簡の中で彼は娘の死のことを以下のように述べている。

私はできる限り働いています。気を他へ逸らせて下さったことに感謝しています。子供を一人失うということは、いわば重いナルシシスト的な傷心であるような気がします。悲しみといったようなものは、おそらくそのあとに襲ってくるのでしょう。¹²⁾

また、1923年のレヴィー夫妻宛の手紙には、ハルバーシュタットの死に向けて、相次ぐ不幸に襲われた後の堪え難い悲しみが次のように綴られている。

この喪失には私はとても堪えられません。これ以上につらいことを体験したことはないように思います。おそらく私自身の病気による衝撃もそれに輪をかけているのでしょう。私はやむを得ず自分の仕事をしていますが、一切は結局のところどうでもよくなりました。この子の死には耐えられないように思います。¹³⁾

また他方では、精神分析理論の形成過程で、ユングやアドラーなどの優れた人物との邂逅と離反を経験している。

このような数多くの愛する者との死別や離反を経験しつつ、喪の作業について言及したフロイトではあったが、彼が考察した悲哀の心的過程と彼自身の理論との間には、看過できない差異が在るものと考えられる。喪の作業の地盤に、神経生理学的基礎があり、まず自己が自己の一部に存在する他者を喪ったことによって生じるものとされ、次いで、自己愛の障碍が引き起こされるとされた。つまり、その喪失を経験した者は、心の中に存在した他者を喪うという経験が、あたかも自己の一部を喪ったごとくに感じられ、そのことが基となって喪の感情が生じるとされたのである。この理論の前提となるのは、自己にとっての他者は、自己の心の内に存在する他者、更に言うと、自己の記憶の内にある他者であり、問題となるのは、喪ってしまった、愛する存在にいつまでもリビードを向け続ける自我自身にあるということになる。それ故、喪の感情は、「徹底操作」(Durcharbeiten)によって克服することが出来ると共に、克服されなければならないものとされた。フロイトは「無常」の中で喪の悲しみについて、次のように述べている。

喪の悲しみはそれがどれだけ痛ましいものであっても、自ずと尽きてしまう。失われたものを何もかも諦めた暁には、悲しみそれ自体も尽き果ててしまう。そうなれば私たちのリビードも再び自由になり、私たちがなお若々しく生命の活力をもっている限り、できるだけ同じくらいの貴重なもの、あるいは、より貴重なものによって失われた対象を代替することができる。¹⁴⁾

確かに、フロイトのこの論文は第一次世界大戦の敗戦による喪失に打ちひしがれていた民衆の心に響いたであろう。しかし、喪の悲しみは、「自ずと尽きてしまう」ものなのだろうか。少なくとも

「失われた対象を代替することができる」として、人は愛する他者の死を受け容れられないのではないだろうか。いやどのような方法をもってしても、受け入れられないのかも知れないが、それでも愛する人が存在しなくなった世界で何とか生きること、それはどのようにすれば成就されるのだろうか。

次いで、多重の喪失体験による複雑性心的外傷への週1回の精神分析的な心理療法の過程に、作品造りを持ち込むことがどのような意味を持つのであろうか。筆者が4年4ヶ月の間で177回の心理面接を行ったある臨床例を通して検討してみたい。

最初の記憶

晴れた日の庭に置かれた金盥に張った水、
1匹の蜜蜂がその水を飲む、
水面の波紋の光景

最初の作品より

子どもの頃、庭で蜂が金ダライの水をのむのを見ていた。
タライの横にそっと座ると、蜂は攻撃するでもなく、水面にずっと立っていた。
私はたしかその時、今まで誰にも話してこなかったことを、その蜂に話したのだ。
いつ、私はそれを語りおえて、いつ蜂は飛びたっていったんだろう。
ついさき程まで、それは続いていたように、そんな風に私は思っていたのだ。
(だれに話しかけていたんだろう。)(彼はどこに行ってしまったんだろう。)

臨床例

クリニックで週1回50分の心理面接を担当した20歳後半の女性のAは、芸術的才能を持ち、大学時代から短編の作品を創作していた。Aが心理面接を受ける動機は、「自分自身を土台から建て直すことがしたかったから」であった。彼女は心理療法を「解体作業」に例え、「自分自身の無意識的なものを言語的に掘り起こすこと」と定めた。他方で、心の中では引きこもった(withdrawal)まま、感情を表出することを拒否しているようだった。この時、蜜蜂の本能の持つ規則性に美の極致を見て、「美しいものを美しいと感じたまま死にたい」と述べる。

生育歴

生まれてまもなく両親が離婚し、Aは母親の実家で育つ。幼少期は、祖父母を実際の両親と思い

過ごしていたが、母親の再婚を契機として、母と義父との3人での生活が始まった。ここで、彼女は両親と思っていた祖父母が本当の親ではなかったという最初の喪失を体験し、更に義父弟が生まれた後に、深刻な愛情剥奪（deprivation）を経験する。その一方で母親より大学進学を勧められ、芸術系大学を受験し合格する。大学を卒業した頃、実父が多額の借金を残して不審死したとの知らせを突如受け取る。このようにAは過去に多彩な喪失体験すると共に、父親に対する象徴的な死別体験を二度に渡って経験している。

Aは20台後半のある仲秋の夜に、服薬後、刃物で自傷し、川での入水を図る。自ら自死の方法論を調べ、近隣に迷惑をかけずに死ぬるとかを考えて実行に移したと言う。入水した際は、葬儀代がかからない場所を選んだ。その一方で、自身の死後に、「母親にアイデンティティになるものを見られたくないし、見ても価値が分からないので、蔵書、研究資料、論文を処分した」後に彼女は自身の計画実行をした。その際、「第三者の方が遺体を目にするのはショックだと思うので、時間差のメールで警察に連絡が行くように設定したが、致命傷までいならず、警察に発見された」と語る。その語り口からは、自分の存在を消し去りたいという思いの強さを感じられた。

入水は未遂に終わり、意識不明で病院に搬送され、Aは一命を取り留めた。自死未遂はこの入水以前に3回あり、最初は、10歳の時、次が10代後半で、三度目が20代前半の時であった。「子供の頃は18歳位で死ぬと寿命みたいな感覚で思っていて、将来に対する夢とか希望がなかった。母親のことが憎いというより同じレベルになってはいけないと思う」と述べた。

面接過程

初回面接時、緊張が強く、顔に表情が無かった。外見は、ショート黒髪、紺のフリースのジッパーを首まで上げ、オレンジのショートパンツの姿であった。時折煙草の匂いがする。

自身の過去のことを語る際は、淡々と感情を込めず平坦に話すのが印象的だった。その際、視線はほとんど合わさず、伏し目がちに会話をする。辛い話では、目に涙を溜めているように見えたが、表情は硬く、ときより眉間に皺を寄せて話をした。会話の細部にこだわって話すので、全体の筋が伝わるまでに時間がかかり、全体像を理解するのに苦労した。

初回面接後、「2、3日はダメージが大きく沈んでいる。友人に話すのとは、クオリティや質感が異なる。感覚ごと以前の状態に引き戻されるところがある。早くこの解体作業を終わらせたい。解体する時に、色んな物が飛び散る恐怖があるが、掘り起こす作業をしないと新しいものを作るということにはならないので、その作業を終わらせたい。逆に言語的に掘り起こして頂いた方が良いと思う」と語る。

初回夢 (initial dream)

【駅の夢と城下町の夢】11回目の面接で、小学生の頃から繰り返し見ていたという初回夢を報告する。「電車のホームから突き落とされる夢と城下町のような所を多種多様な人種の子供がどこかに向けて駆け回るとい夢。(最初の夢は)よくある電車の駅のホームで、モノクロの状態、コートの男性がいる。その男性の顔を見ようとした時、後ろから突き落とされる。」

〔連想〕「通勤している中年の男性で、コート又は正装をしている。(夢は)セピア色なので、コートの色はベージュ。象徴として考えると、父親、実父を覗き込もうとした。服装や背格好から中年の男性。そこから自分の父親、実父を連想しました。後は電車を待っている人達がありました。

城下町の夢は、カラーの夢だが薄ぼんやりとしている。すごい速度でずっと走っていて、迷路のような所を全員がある場所に向かっている。城下町のような所で、行ったことのない西洋の城下町をゴールがどこにあるかも分からずに、走っている。黒人、白人、黄色人種の子供達が、レンガのような道を自分と同じ年、同じ背格好で。表情はにこやかで、目があつた時、目配せをする感じで、みんなはどこに行くのか、ゴールを知っているように思えた。私はゴールがどこか分からないけど、一緒に走っていました。爽快ではないが疲れを感じなく走っていた。

この繰り返し見ていた二つの夢は、中学の時からぼったりと見なくなる。ただ、この走る夢を自分で分析してみると、精子が卵子に向かって走って行くという意味。そこから父親とも関係するかも知れないけれど、私の実父のことが分からない。子供達がにこやかに笑って走っているのが不可解で、インパクトのある夢でした。ホームから突き落とされる夢は、自分では、デストロドーの象徴のような夢だと思います。突き落とされた場合、普通恐怖を感じるものですが、死すなわち恐怖というのはまったく感じない。線路には待避所というところがあるので、そこに逃げたら助かるかと思っていました。』

しかしAの根底には、自身の血脈、DNA、血を残したくないという思いがあり、「物理学上にも生理学上も家系上もここで止めなければならない」と思っていた。それ故に、「どんなに相手に好意を持っていても性行為が出来ないので、相手に負担をかけるというのが必須であるので、付き合うという行為は、20代前半で辞めました。」と語る。

(第3期:46~87)45回までの面接の過程で、Aが過去に書いたエッセイや短編小説を話題にして来た。そのことを彼女が「ハリウッドのゴミ箱漁り」のようだと表現し、過去の動きようがない静的な作品では、面接が停滞することが予感された。そこで、「今ここでの」関係性の中から生まれる作品を扱う方が、生き生きとした創造性が生まれるのではないかと思い、筆者から「作品を書いてもらって、その作品を通して考えて行きませんか?」と提案する。

その回の後、Aの友人が住む街で大規模な地震が起り、激しく動揺する。「自分のことは怪我しようが気にならないが、他人は触り方を間違えたら壊れてしまう。傷付いたり、壊れたり、死んだりする。儂いものだと思っています」。Aの抱く他者の存在への儂さは、そのままA自身が自己の存在を儂く捉えていることにつながっている。

次に、A自身の話題については、「きちんと美しいものを美しいものとして、喜ばしいものを喜ばしいものとして感じられる状態で死にたいというのが、自分の生の目標だったので、それに挫けた、失敗した。超人になり損ねた状態なので、その現状で死ぬことはできないまま、ニヒリズムはどんどん折りのように溜まって来ますし、恨み事を言いながら死ぬのは、自分の尺度からして負けることと同じなので」と答える。Aにとって死は、美の極致点として感じられており、この世からの飛躍としての死があると思われた。

(第4期:110~126)89回目で、Aはある男性から何度も告白され、自身も大学時代からの親しい友人に「好きだ」と伝えたことを報告する。その男性からは『人間的には好きだけど、付き合うことは考えたことがない』と言われる。「すごくライトな絶望感と言いますか、『母さん死んだ』という感じ、ハッピーな出来事ではなかったんですが、生きてないと遭遇しなかった出来事なので、今

回のこの状態は生命力を当てられたような感覚」だった。そして、ある医療系の資格を通信教育で取得することを思い立つ。

この時期 A は、複雑性心的外傷による解離の防衛機制について以下のように語る。「自分の体だけと機械を動かしている感覚、自分の意識は機械にタコ糸のようなもので何となく繋がっているような、体と寄り添っていない感覚」で、小さな自分（親指と人差指で示す）が目の奥に居て、ただ座っているだけのような、目の奥にいる存在も明確な意識が無いと言いますか、心ここにあらずというもの。映画館に一人でいるような、巨大なスクリーンを通して見ているような感覚です。人間にとって生と死が極端に乖離しているんじゃないかとすぐ向こう側にあるんじゃないかな。物心ついた頃からずつと離人症かな」と笑う。「自分が生きてるかどうか分からない。数年前の身辺整理していた時ほど悪い状態ではないにしても、夢の状態というのは変わっていない」。

（第5期：110～126）仕事を探し始め、知人の紹介で公的機関の非常勤職員の求人に応募し、面接を経て採用が決まり、3年ぶりに働き始める。

【猫の夢】家の猫が機械仕掛けの猫になっている。その猫と2階建て住居の2階に暮らして居る。外の世界には、アイボの野良犬みたいのが一杯居る。窓を開けると、そこから猫がものすごい速さで走って出て行く。その後、猫はロボットの犬の首輪を持って帰って来た。犬を倒すとランクに応じてお金がもらえる。それは星が5つ付いている首輪で、町中から拍手が起こる。それを近所の貴金属屋に持って行ったら、売値が五万円だった。

場面が変わり、料亭で恩師や同期の女の子達と会う。その中で猫が小学校低学年位の女の子の姿になっていて、恩師が「このチョコレートめっちゃ上手いや」と振舞ってくれていて、猫は自分の横にぼおと座っていて、チョコレートを食べていた。私は猫の足、ふくらはぎをずっとさすり、裸足で子供の足だと思っていた。

〔連想〕実際こんな感じになってくれたら良いなと。ロボットになって怪我とか病気もしなくなり、人間型になることで意思の疎通が取れる。アイボを倒したら換金できるシステムでドーベルマンくらいの大きさを街中から拍手が起きる。自分が目で追えない位の速さで走っていた。女の子の姿になったのがあまり違和感がなくて、そういう姿に変えられたら一緒に外に出られるのかなとったりしました。

翌回、飼猫の匂いの出る孔が裂け、その瞬間叫び声はかなり悲痛だった。孔が裂けているので最初は悪臭がしたんですが、なじみのある臭さというか、彼女の匂いが好きなんだろうなと思いますね。そのことも結構ショックだったと語る。

死と生きることを巡る思考

A は、物事について「言葉で考えてしまうと思考が早く進み過ぎてしまって」、その結論が未来において唯一はっきりしている自己の「死」という事実に行き着いてしまう。そのために、「猫」みたいに言葉で考えず、言葉を持たなかったとしても、「優しくしたり、親切にしたり出来ること」を理想としていた。「マリーナ・アブラモヴィッチという現代アートの魔女のような身体感覚は、言葉を超えてその向こう側に持っているものを表現する域に入っていて、ロジックだけで繋がりようのないこと」だと言葉や論理を超えた身体感覚についての憧れを示した。

自身の過去を振り返り、「昔から熱するのが早く、冷めるのも早いという感じですかね。多分未来まで持ち越せない。未来に対する指向性がない。今この瞬間、未来にならないくらいの先しか自分が保障出来ないし、責任も持てない」、自分自身と比較して、家庭を持ち子供を育てる友人に対して、「純粹にすごい」という思いと未来において責任を持つことへの欺瞞性を同時に有しているように感じられた。

生きることに於いて、Aは、「生きる為に仕事をするという感覚」が無く、「仕事に対して純粹な熱意しかない」、「目の前に熱意を傾けることがあったら、その瞬間だけ死ぬことを忘れる」と言う。

「死は距離感が近すぎて、敵でも味方でもない。物事は全部死に行き着くんだけど、大学時代は自分が判断することに開き直っていた。絶対判断みたいな感じで。判断すること自体が暴力的で、高速で物事を考えると死に行き着く」。しかし、「死以外の未来って何も決まっていな」こともまた事実であった。Aにとっては、「死はコンビニ位近い距離」だったが、他の人にとって、(死は)カムチャッカ位遠い」のがどうしてなのか理解できていなかった。

【電車と茶会の夢】茶道、お茶に関する話をしていて、自分が高校生位で、コンビニの前で母親が居る。一緒に居たくないの外に出ると、近藤先生が現れて、土曜日午後診のみになったので、ある駅から電車に乗ったら一報して欲しいと言う。最寄駅まで乗り継ぎ、めんどくさいな、途中の駅で乗り換えに2回も失敗する。B線に乗ったら、C駅で乗り換えるというのを教えてもらってなかった。駅員さんばい人に聞いて、電車に乗る。変な電車で畳が敷いてあって、お茶を飲む。その前の夢の話。大学の時の同級生のEさん出てくる夢で、大学のレセプションチックなパーティーで外国人ばい人達が多く、別室で茶道、Japanese traditional teaを振る舞う。壮大な夢だった。

〔連想〕夢の状況で指示されたことはすごくめんどくさいなと乗り換えるのが嫌いなのですが、何か意図があるのかなと、基本電車って全然好きじゃない。どちらかと言うと自分が悪いんじゃないか、疲れた、怖い、帰りたい、帰る、汚れた、暗い、痛い、辛い、電車に乗るとそう感じる。自分の動力でないものに移動を任せるとするのは。

(第9期:165~177) Aはこれまでの過程に触れつつ、「物語を書く時は、そこから自分ではない誰かが産まれてくるのであれば、救われて欲しい、幸せになって欲しいという思いで書いています」と作品作りについての思いを話した。次に、自分自身の「アレテー(徳)」について思いを巡らし、それは、「良く生きること。自分は魂を傷つけないこと、勇気を持って、正直に生きること」と自分の過去を振り返り、自らに「人を救うとは何なのか」についての問いを立て、「自分は自分を救って来た」中で、「勇気を持って正直に、誰にも同情されず、その上で永劫回帰、いつも死のうとするギリギリの手前だった」と言い、ニーチェが友達を星に例えて、「混沌から躍り出る星達」と言うように、自らにも「遠くにあって光っているような思い合える存在」が居たことを自覚する。その友達からも『死にたがりだ』と思われるけど、「エロスとタナトスは実際はつながっていて、死ぬしかなかったから死のうとした」のだと回想した。

心理面接の終結において、「ニーチェおじさんのように、同情することもされることも拒み、永劫回帰とは、いつかみんなと再会できるという思想、たくさんの愛しい人や愛する人の再会を祈って、

美しいものや心を満たして、作品を作ることに、健やかなる日々をお祈りしています」と話す。他方で、「アイデンティティをどこにも残したくない」という気持ちと「どこかで希望を捨て切れていない」という理由で心理面接を続けてきた。「やっぱり自分は間違っていないと思う。他人の御心に沿うというもの、多分生きている以上それをすると諦めているし、(死の欲動を) 治めていきます」と力強く言い切った。

考察

面接初期の段階で筆者は、Aが抱える「死の欲動」を扱いきれず、耐えられなくなることで面接が中断するか、再び自殺を図るのではないかと不安があった。入水についてAに聞くと、「金ダライの水とミツバチ」、「李白の詩と死」が浮かんだ。ここからAに関して、ナルキッソス神話に由来するような自己愛的な障害を抱えていると思われた。そこで、大学時代にAが創作していた作品を面接の中で取り扱うことを筆者は提案した。なぜなら、筆者が不安に耐えられなくなったということだけではなく、彼女の作品の持つ力は、即ちこの女性の潜在的な力であり、彼女の過去の創作活動がこの面接の希望であると筆者が見立てたためである。

初回夢【駅の夢】から連想されることは、Aが生まれる前に生き別れた父親の存在に近付きたいが、父親を知ってはいけない、存在について触れてはいけないという「禁止」の機制の働きであった。実際、Aの原家族の中でも父親のことは話してはいけないという暗黙のルールがあったのであろう。Aは、この夢から「デストルドー（死の欲動）の象徴と連想している。それは、Aが幼少期から父親の不在について口にしてはいけない家庭で育ち、象徴的な父親の死を自分1人で抱えて来たことが示唆されていた。ただ、夢の中でホームから突き落とされた「線路には待避所があって逃げたら助かると思っていた」ところから、父親を知ろうとして母親から罰せられたとしても、シュタイナーが言う「こころの待避所」(psychic retreat) と思える場所を幼いながらに持っていたと思われた。

シュタイナーは、ローゼンフェルトが心の中にある自己愛的で防衛的な組織の理論を発展させ、この組織化された構造物を「こころの退避(所)」として概念化した。分析の目的は、患者の防衛を取り除くことではなく、防衛を理解することであり、その理解に助けられ、患者が徐々に自分の新しい可能性と能力に気づくことができるようになることであると主張している。¹⁵⁾

この夢からは、この時代のAにとって、「こころの退避所」は何物にも変えられない大切な場所であったことが伺われる。その心的な場所は、母や義父との心理的な距離が離れる中で逃げられる安全な場所として機能していたのであろう。

また、他方の【城下町の夢】、薄ぼんやりとしてはいるが、色彩豊かな城下町の夢からは、一方の夢の象徴だった「死の欲動」からの対比として、「生の欲動」が感じられるものである。Aはこの夢を「精子が卵子に向かって走って行く意味」と連想し、生命、誕生、この夢からは、Aの潜在的な力が感じられ、創造的に生きることが示唆された夢であった。

第3期以降、Aより作品のお題を提示することを求められ、翌週にAがそのタイトルの作品を作成するという形で、面接が展開して行くことになる。この時期では特に自身の同一性、存在を残したくない思いが語られ、例え他者の記憶の中にも止めて欲しくないと思うことが面接の主題となっ

た。ただ、作品を残すことや他者と関わることで、逆説的に彼女の生を支えることになっていると理解することが出来る一方で、この世に生き残ってしまったという罪悪感を抱えることとなった。

このような創造活動はどのように心理療法過程を進展させるのであろうか。ウィニコットは、児童分析において、「建設的な遊び」や「創造的な活動」により治療が促進されることを臨床例から導き出している。更に、「人生は生きる価値があると個人に感じさせてくれる、他の何にもまして、創造的な統覚 (creative apperception) である」と創造性 (creativity) と生きること (living) の関連を指摘した。¹⁶⁾ 他方で、「自分を作り直していくというような建設的な努力や、自分の健康にたどり着くための努力が、実は必ずしも達成感を生むわけではないということに患者は気づいていかねばならない」と警告する。その起源を辿ると、「母親の憎しみ」か「抑圧されて無意識になっている母親の憎しみ」に行き着くとする。¹⁷⁾

面接の初期に、A は心理面接を解体作業に例えていた。その作業では「色々な物が飛び散る恐怖があるが、掘り起こす作業をしないと新しいものを作るということにはならない」と言いA は面接場面に臨んでいた。その覚悟の裏側には、努力は必ずしも報われるわけではないと感じられた。

では、創造性が生きることと結び付くためにはどのような舞台設定が必要なのだろうか。パリントは、『治療論からみた退行』で、「心の三領域」について言及している。その領域はそれぞれ「エディプス領域」(Oedipal area)、「基底欠損領域」(basic fault area)、そして「創造領域」(creative area) と名付けられた。「創造領域」は、「外的対象の非存在を特徴」とされ、「自己の内部から何ものかを産出することにある」と仮定された。彼は、創造中の沈黙の扱いを抵抗と見る見方から、沈黙が何かを教えてくれるのではないかという見方を提示した。¹⁸⁾

本事例ではA がやや退行しつつ「基底欠損領域」において作品のお題を筆者から求めた。そして、「創造領域」で作品を創造し、面接場面で筆者と共に作品を味わうという体験は、面接場面の内と外をつなげる要素として、機能していたと思われる。その結果、A は創造活動を通して、現実場面ですることを少しずつ受け容れて行くようになったのではないかと思われる。

第4期に入り、複雑性心的外傷による解離の防衛機制について触れ、「夢の状態」にいてることには変わりがないと言う。一方、ある医療系の資格取得のために通信教育を始めるなど、再び生き直す準備を始めた。

この時期のA は死への思考を巡って、「自分に向かって『死ぬ』とか『消えろ』とか『恥知らず』と言っているが、その自分と毎晩付き合うことで、黒い絵の具と白い絵の具が混ざらないように、死を遠ざけていた」。毎夜、自分自身と向き合うことで、まるで絵の具の色が黒一色になってしまうかのように、生と死が混ざり合い、死をたぐり寄せてしまうことを防いでいた。作品を作り続けること、自分自身のことを物語ることで、A から死を遠ざけていたと思われる。

第5期に、A の中に仕事をしようと言う気持ちが表れ、仕事を探し始め、採用面接に足を運ぶ。やがて知人の紹介により、彼女の発達特性に理解のある職場環境の下で働き始める。公的機関の仕事を始めたという報告の後、A は【猫の夢】を報告した。この夢では、生き物だった「猫」が無生物の「機械の猫」になり、最後の場面では、「女の子」に姿を変えている。それは、大切な存在である「猫」が機械になることで、怪我や病気をしなくなることで、次に人間型になることで、一緒に外出することが出来るということ、「猫」の存在を自分の娘のように感じているということ、そしてこれらの中にはA 自身の無意識的な願望が反映されていると思われる。

現実場面では、A は3年暮らした部屋を出て、働き始めた。そしてこの夢の中で、A が社会に出

て、お金を得た感動を「町中から拍手」が起こり、祝福されるという形で表現している。

更に示唆的なのは、Aがこの夢を見た後、Aの猫の孔が裂け、強烈な匂いを感じるが、生き物の生々しさを感じることがあった。前回の夢がある種の予知夢として働き、彼女が再び生の現実の中で生き始めたように思われた。

【電車と茶会の夢】母親から逃れた後、母親転移の対象として夢の中に著者が現れる。そこでAは、面接の時間枠の変更を一方向的に告げられ、面接場面に赴く方法も電車に乗るという苦手な方法で、遠回りの手段を筆者から指示される。その指示を「めんどくさい」と思いながらも従うが、乗り換える駅を教えてもらっておらず、2回も間違えてしまう。更に、「自分の動力でないものに移動を任せる」ことへの嫌悪感が表明されるが、これらは心理療法に対する陰性感情を表したものであろう。

大学のレセプションパーティーで、外国人に日本の伝統的なお茶を振る舞うのはAの隠された万能感が表現されているようであるが、多くの人と関わりサービスを提供するという今のAの仕事との関連があり、その仕事の成果に自信が持てているようである。

以降の面接では、Aの転院による心理面接の終結を巡り、母親の不在と父親の喪失の再演が生じた。それは喪失した対象を巡って、あたかも治療者との間で喪の作業を行っているかのようであった。再演のある部分は「徹底操作」されずに、面接場面外での行動化として現れたが、Aは仕事や友人とのつながりを通して喪失の再演を乗り越えつつあった。Aはこれまでの面接を振り返り、自分の「アイデンティを残したくない」という思いと「希望を捨てきていない」という葛藤の中で生きてきたことを再確認し、その姿からこれからも生の営みを続けていくことが予感された。

注

- [1] リンデマンによると、一般には悲哀 (mourning) という言葉が、葬送儀礼など哀悼の社会的側面を指し示す傾向があることから、grief (悲嘆) が用いられる様になったとされる。

引用・参考文献

- 1) Freud, S. (1917): Trauer und Melancholie. (伊藤正博訳 (2010): 悲哀とメランコリー, フロイト全集 14. 岩波書店. 429-430 頁。)
- 2) 同書, 137-138 頁。
- 3) Freud, S. (1915): Vergänglichkeit. (本間直樹訳 (2010): 無常, フロイト全集 14. 岩波書店. 331 頁。)
- 4) Freud, S. (1920): Jenseits des Lustprinzips. (須藤訓任訳 (2006): 快原理の彼岸, フロイト全集 17. 岩波書店. 90 頁。)
- 5) 同書, 92 頁。
- 6) Freud, S. (1923): Das Ich und das Es. (道旗泰三訳 (2007): 自我とエス, フロイト全集 18. 岩波書店. 38 頁。)
- 7) 同書。
- 8) Lindemann, E. (1944): The Symptomatology and Management of Acute Grief. *American Journal of Psychiatry*, 101, 141-148.
- 9) American Psychiatric Association (1994): Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV. *Amer Psychiatric Pr* (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳: DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引. 医学書院. 245-246 頁。)
- 10) 瀬藤万里子・阪武彦・丸山総一郎 (2004): 死別後の悲哀に関するフロイトの見解とその批判. *神戸親和女子大学研究論*, 37, 21-38.
- 11) 須藤訓任 (2006): 解題, フロイト全集 17. 岩波書店.
- 12) Freud, S. (1917): Briefe 1873-1939. (井村恒郎・小此木啓吾他訳 (1970): 書簡集, フロイト著作集 第

- 八巻 . 人文書院 . 336 頁。)
- 13) 同書、352 頁。
 - 14) Freud, S. (1915) : *Vergänglichkeit*. (本間直樹訳 (2010) : 無常, フロイト全集 14. 岩波書店 . 332-333 頁。)
 - 15) Streiner, J. (2011) : *Seeing and Being Seen: Emerging from a Psychic Retreat*. (衣笠隆幸監訳, 浅田義孝訳 (2013) : 見ることとみられること - 「こころの退避」から「恥」の精神分析へ . 岩崎学術出版 . 1 頁。)
 - 16) Winnicott, W. (1971) : *Playing and Reality Seen*. (橋本雅雄, 大矢泰士訳 (2015) : 改訳 遊ぶことと現実 . 岩崎学術出版 . 90 頁。)
 - 17) Winnicott, W. (1969) : *Development of the Theme of the Mother's Unconscious as Discovered in Psycho-Analytic Practice*. (牛島定信監訳, 倉ひろ子訳 (1998) : 精神分析治療に現れる母親の無意識という主題の展開 . 岩崎学術出版 . 6-7 頁。)
 - 18) Balint, M. (1968) : *THE BASIC FAULT: Therapeutic Aspects of Regression*. (中井久夫訳, (1978) : 治療論からみた退行 - 基底欠損の精神分析 . 金剛出版 . 43-47 頁。)

(アルコ心理オフィス代表)